# 後藤静香選集

第十卷

善本社

## 刊行のことば

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。

彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスペラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。


後藤静香選集　第十巻
実践運動編・静香年譜

一九七八年十月十日　初版

著者　後藤静香
発行者　山本三四男

企画編集　後藤静香選集刊行会
代表　中山隆祐
〒160 東京都新宿区高田馬場一―二三―一二
振替　〇―一一二九〇

発行所　株式会社　善本社
〒101 東京都千代田区神田神保町一―六〇
電話　東京　二九四―五三一七
振替　東京　九―一一九五五七
印刷　花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえいたします

0312―005901―3993

《目 次》

## 実践運動編

### 歩みの跡

■創刊のころ……四
「希望」発刊の趣旨……四
現代の奇蹟と感激……一〇
■希望社小史……一八
希望社の事業とその信念……一八
希望社の使命……五七
希望社精神とは何ぞや……七八
ご下賜の光栄に浴して……九一

倫理綱の大成……九九
▒心の家……一一〇
心の家の理念と運動……一一〇

## 教育実践

▒社会教育……一三四
相互修養会の提唱……一三四
相互修養会真義……一四〇
「教養五年」の完成……一七二
神前早天修養会の提唱……一八二
祈願の雑巾奉納の美挙……一九〇
▒勤労教育……一九一
勤労女学会の開設……一九一
希望社印刷部の開設……一九八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本印刷学校の一日……二〇〇
多摩勤労中学開校……二〇四
帝都学生勤労倶楽部の成立……二一〇
清涼剤……二一六
勤労教育思想の鼓吹……二一六

## 社会福祉

▒盲人福祉……二二一
盲人開発……二二一
▒救ライ運動……二六五
恵まれぬ人々……二六五
鈴蘭村……二八五
再び救ライ運動……二九二
▒援護活動……三〇一

愛に国境なし……三〇一
寒天の悲鳴……三一〇
教育的救護の経過……三二一
工場裡の女性を憶う……三四五

## 生活改善

国民常食改善同盟の提唱……三九一
神聖葬儀の提唱……四〇〇

## 文化活動

▒ローマ字運動……四〇八
ローマ字運動の提唱……四〇八
ローマ字教科書の提供……四一六
▒エスペラント運動……四一九

いよいよ世界的に進出……四二九
希望の讃歌……四三三
欧州最初のスタート……四三六
▒発音式かなづかいの実践……四三四
急　告……四三四

## 静香年譜

明治時代……四三九
大正時代……四五七
昭和時代　1　終戦の年まで……四八八
昭和時代　2　納骨まで……五三六
「後藤静香選集」第十巻の解説（加藤善徳）……五七〇

# 実践運動編

# 歩みの跡

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 創刊のころ

## 「希望」発刊の趣旨

希望に活きよ

**燃ゆるが如き希望**　若き男女は希望に燃ゆ。過去にのみ恋々たるは老婆のことなり。往時を追憶してむかし語りにみずから慰む、あわれむべし、すでに人生の末路なり。若き者は希望に活きよ、希望のもっとも盛んなるとき、活気もっとも盛んなり。

**純潔無汚なる希望**　希望の影を追うて走るべし。しかれどもおん身の希望は純潔なりや。何人にもあきらかに語りうる正しき希望なりや、遊女には遊女の希望あり、ぬすびとにはぬすびとの希望あり。希望の権威はその純潔にあり。

**実現せらるる希望**　いかなる希望をいだくこともわれらの自由なり。しかれどもわれらの現実がこの希望に到達すべき確実なる歩調をもって進まざるとき、その希望は単に一種の空想にすぎず。おん身は真に幸福なる人生を送らんことを希望せらるるか。然らばこの希望にたいしておん身の現在を顧みよ。

## 一　若き婦人の修養

『お嫁いりの準備ができましたか。タンスは、長持は、着物は、それからお料理、お作法、お茶の湯生花、お琴、もうそれらのおけいこはすっかりできましたか』

世間なみにこんなことをたずねる。もちろんこれらの準備が不用でもあるまいが、さらに私の問をすすめてみたい。

『貴女があたらしい家庭を持った後、実におどろくべき社会の波風が、あまり、無遠慮におしかけるようなことはありますまいか。貴女のご主人はかならず品行方正で貴女のみを終生かわいがってくださるやさしい旦那さまときまっていましょうか。お姑さんは、きっと気だてのよい同情に富んだ方だという保証がありますか。貴女の家庭には、複雑な問題の起る場合は断じてないといえましょうか。あなたのご親族、あなたの交際範囲はことごとく善い方ばかりでありましょうか。貴女の一生涯には、生活の不安も危険も起りますまいか。病人はできますまいか。さらに最愛の夫、最愛の子供が、永遠の眠りにいるような出来事が絶対にないと誰か保証ができますか』

私は何も悲観したり、不吉な実例をならべておどしたりするつもりではない。世の中の事実をありのままに貴女の前途にあてはめて見たまでである。このゆえにいま一歩このおたずねを進めてみよう。

『それらの曲折、難関を切りぬけるために、貴女は何の準備をなさいましたか。人生のさかまく波涛とたたかうとき、おん身のタンスが、長持が、着物が、はたして何ほどの役に立ちますか。真の頼りと

なるものは誰ですか。おん身の唯一の武器は何でありますか』

私はいま明瞭に宣言する。

『貴女の最後の資産、しかして最善の武器は、貴女の人格だけであります。貴女の運命をきりひらく最後の責任者は貴女のほかにありません。いま謙遜な心持にかえって、貴女の人格を正直に考えて下さい。逆境にたえうる何ほどの修養がありますか』

たんに逆境の場合だけでなく、人生一切の事実が個人の人格によって左右せられることを思うとき、金ぐさりや、宝石や、着物の流行ばかりを考えている人達の前途がまことに心配でたまらぬ。処女たると家庭の人たるとを問わず、わかい婦人の修養について語りたい、いな語らざるを得ない。これが本誌を発行する第一の理由である。

## 二　女教員の伴侶

全国の女教員は、小学校のみでも、四万三千人という多数である。しかも年々増加の傾向をもっている。私は昨年『女教員の真相及其本領』を発表して、社会の人々に女教員の真相を理解してもらい、同時に女教員みずからが自己を反省して、その本領を発揮するように頼んだ。私は全国婦人にたいして、特殊の使命を有するものであり、またこの自覚のもと、過去十二ヵ年をおくり、いまもまた女子教育家として立っている者であるが、とくに若き日本の女教師にたいしては、みずから進んでその教師であり友であると確信している。おそらく私ほど女教師を理解し、また同情を有する者はあるまいとうぬぼれ

ている。したがって私が何とか方法を講じて、これらの人々にたえず所信をのべ、またこれらの人々のうったえを聞き、憂いあり悲しみあるときの力となり、また女教員相互にも知り合う計画をすることは当然なさねばならぬ責任の一つであると感ずる。私は本誌に毎月女教員問題を記す、また女教員の叫びを紹介する。かくて女教員を刺激し、奨励し、慰撫し、善導するとともに、本誌を通して当局者、学校長等に女教員の声を聞かしめて、よく真相を理解せしめ、両々相俟ってわが国民教育の充実をはかりたい。新聞雑誌の類は幾百種ありといえども、とくに女教員のための機関雑誌は皆無である。女教員が何か発表したいと思うことがあっても、その方法に窮する。もちろん教育雑誌はいくらでもあり、教育上の問題を論ずるのに男女の区別はない。勝手に意見を発表すればよいわけであるが、それは正面のみの理屈である。本誌を全国約五万の女教員に提供したい。これが本誌発行の第二の理由である。

## 三　婦人団体の指導

青年団体に関しては、たくさん著述もあり雑誌もある。文部、内務、陸軍の三省が力をあわせて指導もしてくれる。青年団体指導に関する専門の篤志家もある。しかるに婦人団体にいたっては、実に微々たるもので、全国一万三千の町村中、その何割に生きた婦人団体らしいものがあろうか。内務省あたりで調査すると、何々婦人会とか、何々処女会とかいうような一夜づくりのものが、戸棚の中から現われてくる。どうも戸棚のなかの婦人会では仕方がない。私は女子教育家であり、同時に社会教育家であるから、日本の婦人団体についても、これまた何とかせねばならぬ当然の責任がある。婦人団体の指導、

これは本誌を発行する第三の理由である。

## 四　中堅婦人の提携

いつの時代がきても、ことごとく善人のみとなることはあるまい。ただ善人が勝つか、悪人が勝つかである。堅実な考えの者が勢力を有し指導する村は優良村となり、浮華軽薄の徒が勢力を有する村は淫靡浮薄の村となる。ここにおいてまず善の声を大にせねばならぬ。どうも悪人の声は高いが善はかくれがちとなるから、その声がひくい。したがって勢力がない。自分一人が修養して徳にすすむためにはそれでもよいが、団体のことを思えばたがいに門戸を開放し、相はげまし、相たすけて大きい強い善の団体をもって善の勢力、善の空気をつくる必要がある。この故に、まず全国の中堅となるべき婦人の提携をはかりたい。本誌発行の第四の理由はこれである。

## 五　女子教育の徹底

『女子教育家は教え子のために、一生涯の教師でなければならぬ。無事泰平の場合はともかく、ひとたび彼らの生涯に何らかのとんざを来して煩悶するとき、悲観するとき、判断にまようとき、女子教育家が立ち入って、彼らの指導者となってやらねばならぬ。在校中の三年か四年は教師と生徒とがたがいに相知る期間で、女子教育家の使命は卒業後の一生涯にある』

私はつねにかく信じまたかく主張していた。しかるにひるがえって私の卒業生にたいするこれまでの

態度を思うとき、まことにまことに汗顔の思いにたえない。私が前任地香川県を去るとき、幾夜も泣いた数百の処女がある。私はどうしてその純潔な貴い涙を反故にすることが出来ようか、その前の任地長崎県についても同様である。私の汽車が動きはじめたとき、あの停車場に起った五百の少女の悲鳴を忘れることはできぬ。私はこれらの貴い信頼と敬慕とを、残酷にふりきって平然たるほどに冷たい人間でありえない。毎年毎年卒業生は送り出したが、手紙の返事を書けば関の山、何の世話もせず追いはなしであった。こんなことでは相すまぬ、申し訳がないといつも心にかかりながら、良心の苛責をうけて長い長い間苦しい思いをつづけてきた。わが愛する教え子よ。私の心事を了解して、これまでの無責任と不親切との大罪を許されよ。私はこれから毎月この雑誌のために時間も労力も金銭もささげ、心血をしぼって諸子の友となり力となり、直接の教え子なる諸子はもちろん、間接の教え子なる若きすべての婦人のために真の教育を徹底し、かくてわが積年の罪亡ぼしにかえて、そこに良心の満足を求めよう。これが本誌発行の最後の理由である。

（「希望」第1巻第1号・大正7年6月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com